

編集委員が選んだ本

『希望格差社会』

山田昌弘著／筑摩書房、2004年11月、1995円
「パラサイト・シングル」を見出し、世に問うた著者が、多くの若者の心理に、「希望の喪失」がみられ、「希望格差」が生じている、と力説する。机上の空論ではない。家族社会学の視点からの調査研究、フリーターへの聞きとり、東京学芸大の就職委員としての活動、都の青少年協議会委員や児童福祉審議会委員としての調査検討から導き出された現状認識。それを現役大学生に講義でぶつけ、彼らと質疑応答のキャッチボールを積み重ねる中で、本書は生まれた。

著者が提示するキーワードは、「リスク化」と「二極化」であり、実は若者だけの問題ではない。が、特に若者に与える影響が大きいという。その結果、将来の社会秩序も脅かされると指摘する。危機打開への提言も含め、とても考えさせられた。

『^{グイッ}鬼子たちの肖像

—中国人が描いた日本人—

武田雅哉著／中公新書、2005年9月、777円
日清戦争期、日本のマスコミは、中国人を悪意と軽蔑を込めて「豚尾漢」と呼んだ。豚の尻尾のような辮髪に由来するこの呼称は、戦争報道において盛んに用いられ日本人の中国人観を形成した。逆に、中国で発行された絵入り新聞（『画報』）の中で「倭奴」、後に「鬼子」と呼ばれた日本人は、虚実入り交じった姿で描かれ、中国人の日本人観を形成していった。本書では、清朝末期の中国人がイメージする「日本人」が多数描かれており、当時の中国人の日本（人）観を知る手がかりとなる好著である。

『護憲派のための軍事入門』

山田朗著／花伝社、2005年10月、1575円
日本国憲法第9条に基づいて平和な世界を求める人のための「軍事入門書」。1991年の湾岸戦争以降、自衛隊を海外派遣することは「国際貢献」として既成事実化され、それを肯定する世論づくりもされてきた。「国際貢献」論の欺瞞に迫らないためにどうすべきか。ハード（自衛隊戦力の現状）、システム（戦争体制づくりの現在）・ソフト（戦争を肯定する憲法・教育基本法「改正」）から検証できる。「現代軍事の基礎知識Q & A」や「戦争と軍事を知るための用語集」など、戦争完全非体験世代が次世代に伝えていくことも視野に入れていることがうれしい。

『いまどきの「常識」』

香山リカ著／岩波新書、2005年9月、735円
ここ2～3年、高校生たちが、理念や本質を追求するよりも、現実のなかでどう賢く身を処すか、と考える傾向が強まってきている、という感覚があった。

しかし、大人の社会が、ここまで来ているとは……正直言って、暗澹たる思いになった。「平和」「平等」などは綺麗事、すべては「自己責任」、過去にこだわるな、などなど。そういう認識が強まっていることに、目をそむけてはなるまい。生徒たちの実感とずれたところで、一方通行の授業をしないためにも。

『刀狩り—武器を封印した民衆—』

藤木久志著／岩波新書、2005年8月、819円
「藤木刀狩り論」の集大成である。秀吉政権は強大な権力を背景に民衆からあらゆる武器を没収し、民衆を武装解除したというのが刀狩りの通説である。藤木氏はこれを虚像と断じ、村に多くの武器があること示しながら、農民が自立と合意を基礎に、自ら武装権の行使に封印をしたとの論を展開している。ここから一方的に支配されるみじめな民衆ではなく、自立した民衆という、近世の新たな民衆像が生まれてくる。さらに、明治の廃刀令、GHQによる武装解除を合わせて「3つの刀狩り」を指摘し、その都度民衆自らが、平和への強い共同意志を示し、武器を封印してきたとしている。憲法9条改正問題とも関わらせ、「藤木平和論」として読むこともできる。

『増補 憲法「改正」』

—軍事大国化・構造改革から改憲へ—

渡辺治著／旬報社、2005年11月、1050円
予定されている憲法改正の国民投票の争点は、「自衛隊は合憲か違憲か」ではない。本当の意味は「自衛隊を海外で戦争させることに賛成か反対か」である。憲法改正を望む人々のねらい、憲法改正と政府の構造改革がどう結びついているかなど、現代を鋭く分析する著者ならではのタッチで、詳細に整理されている好著。

『シリーズ憲法9条』（全3巻）

歴史教育者協議会編／汐文社、2006年1月、各2100円
「9条を知っていますか」、「平和を求めた人びと」、「世界の中の9条」からなる。今年は日本国憲法公布60年。「新しい人権を取り入れるなど憲法を見直すべき」「自衛隊を憲法に位置づけるべき」という声があるが、本当に平和な未来につながるのか。歴史、人物、現代世界との関係など多角的に憲法9条の有意義さを実感できる。小中学生を意識した文体・ビジュアルな体裁も良い。